

# 町史

## ついでにおきの話

200

長岡・河井継之助記念館友の会会員  
高梁方谷会会員

小名 泰裕

### 長岡でもなく 会津でもなく

「河井継之助は、長岡城下で討ち死にするべきであり、その屍は捨て置かれその首は時山直八（\*1）が戦死した朝日山に晒されるべきであった」と、私は思っています。継之助もその覚悟は出来ていたに違いありません。彼は、歴史の負の遺産を死後も背負うべきでした。

河井継之助が引き起こした北越戦争は、本来ならば、起こさなくてもすむ戦<sup>いくさ</sup>だったはずで、また、この戦いが、勝つことができぬ戦争<sup>いくさ</sup>であったことは分かっていたはずで、冬將軍の応援も間に合わず、最後には、負けぬ戦<sup>いくさ</sup>の目論見までが外れてしまったのです。

昭和52年の大河ドラマ『花神』で、準主役の高橋英樹が演じる河井継之助が、「この様で殿さまに会えるか。俺をこの越後の戦場<sup>いくさばた</sup>に置いてゆけ」と叫びます。実際の河井継之助の心中も同じであります。おそらく長岡でその惨

めな死を迎えることによって、長岡人が持つ河井継之助の恨みのいくらかは昇華されたかもしれません。

だが、彼の思いと裏腹に、彼を乗せた担架は会津に向かいまします。ところが、天は、彼を只見までは生かしたのですが、会津若松までは生かさなかつたので

それは、河井継之助にとっても只見にとっても幸運でした。もし、長岡で死んでいたら、少なくとも河井継之助記念館は、平成18年までは出来なかつたであろうし、終焉の間も北越戊辰戦争で焼失、あるいは太平洋戦争の空襲で焼けたであろうことは間違いありません。

また、会津若松にたどり着いたところで、白虎隊の悲劇に埋もれてしまい、終焉の地には碑が建っているだけであつたでしょう。少なくとも、会津若松に記念館が造られたとは思われません。長岡、会津、どちらにしても決して終焉の間は残らなかつたのです。

幕末維新、家屋<sup>かおく</sup>で非業に斃れた英雄もいます。高杉晋作、坂

本龍馬などです。しかし、彼らの終焉の間は残っていません。単に戦争で焼けたというわけではなく、その価値が見出されるまえに建物は処分されているのです。しかし、河井継之助は違いました。幸いにも只見という山間部、つい最近まで陸の孤島であつたがゆえに河井継之助の終焉の間が残りました。

昭和41年に、初代河井継之助記念館ができ、平成5年に立派な二代目河井継之助記念館が新築されました。記念館には、終焉の間や遺品、大河ドラマで使ったガットリング砲、高橋英樹が着用した羽織、袴も展示しています。

河井継之助が塩沢村で亡くならなかつたら、この戊辰戦争の歴史的な人物の記念館は、只見町には存在しません。

数年前から私は、8月16日の河井継之助墓前祭に参加し、直会にも出席しています。真夏でも、初夏を想わせる爽やかな気候の中で墓前祭が執り行われます。直会が開かれる公民館は冷房が要らなく扇風機だけで過ごせます。只見の夏は清涼しく、

川魚と山菜の料理、冷えた花泉は格別です。

『峠』の雛形といわれる司馬遼太郎の短編小説『英雄児』で、「英雄というのは、時と置きどころを天が誤ると、天災のような害をすることがあるらしい」と書いて終わっています。天はその置きどころを誤つたのを後悔したのか、その死にあつては、もっともふさわしい場所を選んだのです。

(\*1) 時山直八・西暦1838-1868  
吉田松陰の松下村塾門下の俊英。清康さから松陰が愛した弟子。奇兵隊参謀。朝日山攻防戦で戦死。



◀墓前祭後、河井継之助を語る会でスピーチする筆者



▲会津若松市建福寺にある河井継之助埋骨の地碑